1999. 12. 28

愛という毒～ ワーグナー「トリスタンとイゾルデ」

たった独りきりで愛を飲み干そうとしてしまう時、愛は毒に変わる。

誰かを愛し、そして、相手の気持ちを確かめずに、もしくは相手にそれを告げもせずに、たった独りで愛を飲み干そうとしてしまうとき、その愛は毒に変ってしまう。相手の言葉の一滴（ひとしずく）一滴、その仕草の一滴一滴、その香りの一滴一滴を、ひたすらに杯に集め、そしてそれをたった独りだけで飲み干そうとするとき、その杯は毒に満たされる。しかも、そのようにして集められた滴ほど、美しく、甘く、そして限りなく苦くありながら、同時に、まるで黄金のように輝く。だが、それは毒の輝きでしかない。

そんなことは、詩だの絵だの音楽だのといったものに昇華できる、いや、昇華することを宿命付けられた者達に任せてしまえばいい。そうでないなら、たった独りで飲み干そうなどとせず、本当に諦めきれるまで、想う相手の傍で生き、ひたすら見つめ続けるべきだ。

もちろん、だからと言ってストーカーになれと言っているわけではない。それは、もはや愛とは呼べない。私が言いたいのは、何もせず、自ら身を引いてしまい、しかもそのことに「自己陶酔」することは一種の欺瞞だということだ。

トリスタンとイゾルデは、いわゆる媚薬によって愛し合うようになったわけではない。傷ついたトリスタンがイゾルデの腕の中で介抱されたとき、そしてイゾルデが、自分の婚約者の敵（かたき）と知ってなお、剣を振り下ろす手を止めた時、彼らの運命は決まっていた。しかし、トリスタンは奸計にはまり、イゾルデに対する愛をねじ伏せ、主人たるマルケ王の花嫁としてイゾルデを迎えにゆく羽目に陥る。しかも、トリスタンは、イゾルデをマルケ王の元へ届ける船の中で、自分の愛を毒の一滴一滴として、これを死の杯に盛っていかなければならなかったのではないだろうか…。媚薬が二人を悲劇に陥れたわけではない、と私は考える。いや、あの媚薬は彼ら自身が杯に盛り、飲み干してしまわなければならなかった「愛という毒」なのだ。

この曲には、むせ返るような甘美さが、登場人物の心理描写のように流れている。その中に、毒の滴の色を聴くのは私だけではあるまい。